

# 皆既日食観測者の受入と観光行動 —鹿児島県大島郡喜界町を事例として—

天 野 宏 司

## 1. はじめに

観光地域の開発・変容に関する研究蓄積は非常に多く、またそのアプローチ方法も多岐にわたる。地理学の分野からは、集落地理学的なアプローチによって、山村順次<sup>1)</sup>が温泉集落の形成、発展、変容・再編などを明らかにしてきた。山村の一連の論考が、「温泉観光集落」という、通年利用が可能な観光資源を抱えた地域を対象にしているとすると、白坂蕃や呉羽正昭は、季節性の高い観光資源であるスキーを活用したスキー場開発と山村集落の変容を明らかにしてきた<sup>2)</sup>。同様の観点から、池俊介<sup>3)</sup>はスキューバダイビングの導入による地域変容を明らかにしている。開発から変容・再編にいたる地域の経時変化についての分析を得意とする歴史地理学的手法で、小口千明<sup>4)</sup>は「海水浴」が療養目的に受容されてから、レクリエーションへと変質し普及していく課程を明らかにした。関戸明子<sup>5)</sup>は、従来等閑視されていた資料群に着目し、温泉観光地がさまざまなメディアによって脚色され・再評価され・変容していくプロセスを描き出した。これらの成果は「観光地」ないし、「観光資源」が季節性の有無があるにせよ、基本的には恒常的に存在し、再現性の高い事象についての定点観測によってもたらされたものであるのに対し、本稿は皆既日食という、いわば「究極の一発芸」に対する分析を行うことに特色がある<sup>6)</sup>。

2009年7月22日に観測された皆既日食からみて、直前のものは1963年7月21日に北海道東部で35秒程度観測されたものであった。これは日本というマクロスケールで見ただけでは46年ぶりの再現事象であるが、ミクロスケールで把握した場合には、限り無く再現性は小さい現象である。2009（平成21）年7月22日に観測された皆既日食の特徴を挙げれば、

- ①日本の陸上における皆既日食の観測は46年ぶりであること。
- ②6分38.8秒の皆既状態が継続し21世紀最長であること<sup>7)</sup>。
- ③国内では、トカラ列島・奄美群島、小笠原諸島など離島部でのみ皆既状態の観測が可能とされた点。



図1 日本における食状態の分布と予想継続時間

国立天文台HPより引用 (<http://www.nao.ac.jp/phenomena/20090722/index.html> :  
2010/3/20閲覧)

の、以上三点に集約できる。

図1は、国立天文台天文情報センターによって示された日食の観測予報である。皆既日食・部分日食の別はあるものの、晴天であれば日本中で日食が観測可能であることが示され、日食当日が近づくにつれ、相次ぐ報道や、観測用サングラスの販売などにより日食フィーバーが発生した。

これにあわせて、皆既状態の長く続く地域へ出かけて観測をしようとする観測ツアーが企画され、販売された。なかでも狭小な離島群で構成される十島村では、少ない人口にのみ対応した脆弱なインフラに対し、許容量を上回る日食観測者の受け入れを企図したため、約40万円の費用負担を含め、報道等で受け入れ準備についての情報が盛んに伝えられた。本稿は、「究極の一発芸」を観測すべく参集した日食観測者の受け入れ準備と、彼らの観光行動を記録することを目的としている。

以上の観点から、メディアを通じ情報の豊富なトカラ列島十島村との比較を行うため、皆既日食帯の中から隔絶性の点で屋久島・口永良部島・喜界島の3島が候補となり得る(図2)。うち、島の規模・行政組織、調査受け入れの可能性などの点から喜界島を調査対象として選定した。

なお、本稿では、彼ら日食という天文ショーを観るために参集した旅行者(ツーリスト)を「日食観測者」と定義する。

## 2. 調査地域と調査方法の概要

### 2.1. 調査地域の概要

喜界島(図3)は、行政的には全島が鹿児島県大島郡喜界町に属し、2009年7月1日現在の人口・世帯数は8,178人・3,752世帯である。奄美群島北端に位置し、奄美大島に東隣する。島内を東経130度線が通り、年間を通じて温暖な気候に支配され、平均気温は20度を上回る。面積56.9km<sup>2</sup><sup>8)</sup>、周囲48kmほどの、隆起珊瑚礁によって構成される小島である。2005(平成17)年の国勢調査による産業大分類別の就業構造をみると、農業に従事するものが22.1%と最も多い(図4)。主要な農作物はサトウキビで、このほかゴマ、電照菊の栽培などが行われ、水もちの悪い隆起珊瑚礁の島であるがゆえに、稲作は行われていない。

島外とは、空路・海路によって奄美大島および鹿児島市と結ばれている。空路は、奄美空港との間に1日3往復、鹿児島空港との間に1日2往復が就航し、『平成18年空港管理状況調査』によると、年間80,462人の乗降客の利用実績があった。フェリーによる海路は、鹿児島～湾(喜界島)～名瀬(奄美大島)～古仁屋(奄美大島)～平土野(徳之島)を往復する平土野航路および、鹿児島～湾～名瀬～古仁屋～平

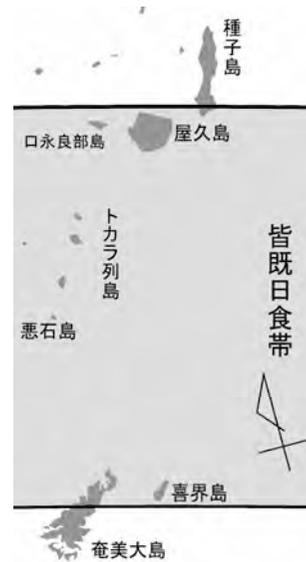


図2 皆既日食帯

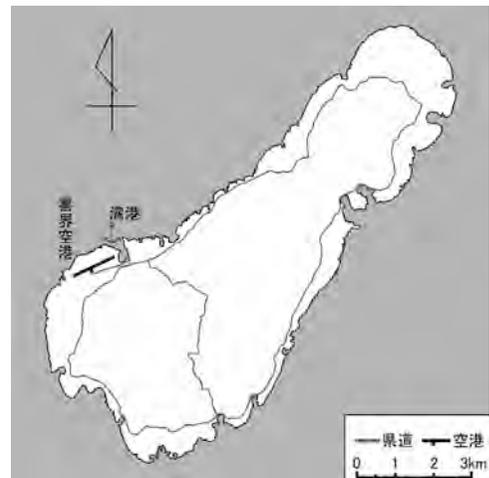


図3 調査対象地域

土野～知名港（沖永良部島）を結ぶ知名航路とがあり、『平成18年鹿児島港港勢』によると18,722人の乗下船者がいた。図5は2006（平成18）年における入島・離島者数の推移を月別に示したものである。入島者数・離島者数と

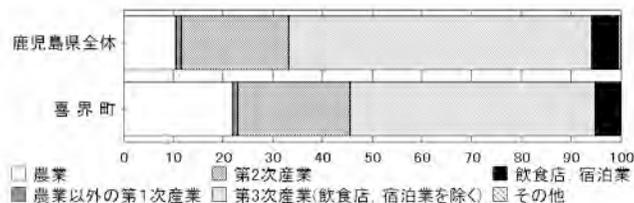


図4 喜界町における就業構造  
2005年「国勢調査」により作成

もにピークは8月に表れるものの、他月と比べて際だって増加する訳ではなく、毎月ほぼ4,000人前後で推移している。季節変動が小さい入島・離島者数は、観光入り込み客数が少なく、島外との出入りは、島民またはその関係者による恒常的な移動が大半を占めることを意味する。このことは、図4で示される就業構造中、「飲食店、宿泊業」に従事する者がわずか4.9%のみであることから傍証される。

すなわち、喜界町内に所在する宿泊施設は少なく、収容可能な人数は極めて小さい中、皆既日食の観測を受け入れることを決した段階で、多数訪れるであろう観測者を受け入れ・もてなし・満足させることが責務として浮上したわけである。

## 2.2. 調査方法の概要

本研究にあたり、以下の方法で資料収集・調査を行った。喜界町における日食観測者の受け入れ体制については、受け入れ主体である喜界町企画課からの聞き取り調査によった。これと同時に、町内に所在する各宿泊施設や観光協会に対しても聞き取りを行った。日食観測者の島内外への出入りは、空路に関しては喜界空港管理事務所から、海路に関しては喜禎運送店からのデータ提供により、2009年7月16日～7月28日までの実数を把握した。厳密に言えば、自家用の飛行機・レジャーボートなどで入島したケースも想定されうるが、把握不能であることと、その割合は微少であるとの判断から捨象した。

日食観測者に対しては、配付用紙方式によるアンケート調査と、聞き取り調査を行った。アンケート調査の項目は以下の通りである。

- 1) 居所・出発地
- 2) 滞在期間
- 3) 帯同人数
- 4) 滞在場所

- 5) 来訪手段
- 6) 島内での移動手段
- 7) 島内での観光先
- 8) 自由記述

アンケート票の配付・回収は、日食観測者の受け入れを行った各テントサイト、各宿泊施設、喜界空港、湾港の各地点で行った結果、141人からの有効回答を得た。以下、これらの資料を活用し分析を行う。

### 3. 喜界町における日食観測者の受け入れ体制

喜界町での日食観測のためには、上述のように飛行機によるか、船による来訪が必要である。ダイヤの都合上、食の始まりからを観測しようとした場合、飛行機利用の場合は日食前日の7月21日に宿泊が必要であり、船を利用する場合は、同様に7月21日に鹿児島港を出港すれば、観測が可能であった。いずれにせよ、島内での宿泊を伴わないと<sup>9)</sup>、観測自体は困難であり、このため、日食観測者の受け入れ・滞在施設として、おもに2種類が用意された。一つは、喜界町役場企画課を中心に組織された皆既日食実行委員会が準備・設営したテントサイトである。もう一つは、島内に所在する各宿泊施設である。図6は、各テントサイトと、宿泊施設の分布を示したものである。島内外へのゲートポートになっている湾港・喜界空港の所在する一帯に宿泊施設は集中し、西岸から南岸にかけては、宿泊施設はわずかに散在するのみである。本章では、上記ふたつの受け入れ先ごとに受け入れ体制と受け入れ実数を把握する。

### 3.1. テントサイトにおける受け入れ

十島村が日食観測者の受け入れに際し、近畿日本ツーリスト株式会社東京法人旅行支店に委託して、受け入れ業務を進めたのに対し、喜界町では喜界町役場企画課を中心に組織された皆既日食実行委員会が窓口となっていた点が十島村と大きく異なる。島内3ヶ所に設置されたテントサイト

(TS)の受け入れ定員は、空港臨海公園TS265人、塩道長浜公園TS250人、小野津グランドTS120人が設定され、計635人が上限であった。テントサイト毎に入島・離島日が異なる計18の滞在コースが設定され(表1)、最も滞在期間が長いコースが空港臨海公園TSに7月16日～7月25日まで滞在するA4コースと、同じく空港臨海公園TSに7月17日～7月26日までの10日間滞在するB5コースであった。一方、最も短期滞在のコースが、小野津グランドTSに7月22日～7月24日までの4日間滞在するF1コースで、喜界島への到着は日食当日の早朝であった。

写真1は、塩道長浜公園TSの風景である。自前のテントを持ち込み設営をしているため、テントの形態・大きさに統一性がないことが見て取れる。特に塩道長浜公園TS・小野津グランドTSは、飲食を提供するような店舗が周辺に存在しないことから、各グループがそれぞれテントのほか、調理道具を持ち込んでいた。

図7・図8は、各テントサイトにおける、実際の受け入れ状況を示したものであ



図6 日食観測者の滞在施設の分布



写真1 塩道長浜公園テントサイト  
(2009年7月20日・論者撮影)

皆既日食観測者の受入と観光行動  
 - 鹿児島県大島郡喜界町を事例として -

表1 各テントサイトの概要と受入実績

滞在場所	コース	到着日	出発日	滞在 日数	大人負 担金	子供負 担金	定員 (人)	申込者 (人)	利用数 (人)
空港臨海公園	A1	7月16日	7月22日	7	¥25,400	¥16,850	25	16	15
空港臨海公園	A2	7月16日	7月23日	8	¥26,400	¥17,850	30	16	14
空港臨海公園	A3	7月16日	7月24日	9	¥26,400	¥17,850	30	0	0
空港臨海公園	A4	7月16日	7月25日	10	¥26,400	¥17,850	20	0	0
空港臨海公園	B1	7月17日	7月22日	6	¥24,400	¥15,850	10	8	8
空港臨海公園	B2	7月17日	7月23日	7	¥25,400	¥16,850	30	21	19
空港臨海公園	B3	7月17日	7月24日	8	¥26,400	¥17,850	60	23	22
空港臨海公園	B4	7月17日	7月25日	9	¥26,400	¥17,850	30	17	17
空港臨海公園	B5	7月17日	7月26日	10	¥26,400	¥17,850	30	0	0
塩道長浜公園	C1	7月18日	7月23日	6	¥24,400	¥15,850	20	17	17
塩道長浜公園	C2	7月18日	7月24日	7	¥25,400	¥16,850	40	39	33
塩道長浜公園	C3	7月18日	7月25日	8	¥26,400	¥17,850	30	24	16
塩道長浜公園	C4	7月18日	7月26日	9	¥26,400	¥17,850	20	3	0
塩道長浜公園	D1	7月20日	7月23日	4	¥22,400	¥13,850	20	20	20
塩道長浜公園	D2	7月20日	7月24日	5	¥23,400	¥14,850	5	5	5
塩道長浜公園	D3	7月20日	7月25日	6	¥24,400	¥15,850	10	7	7
塩道長浜公園	D4	7月20日	7月26日	7	¥25,400	¥16,850	45	33	19
塩道長浜公園	D5	7月20日	7月28日	9	¥26,400	¥17,850	60	16	15
小野津グラウンド	F1	7月22日	7月24日	3	¥21,400	¥12,850	20	25	25
小野津グラウンド	F2	7月22日	7月25日	4	¥22,400	¥13,850	10	19	19
小野津グラウンド	F3	7月22日	7月26日	5	¥23,400	¥14,850	70	36	31
小野津グラウンド	F4	7月22日	7月28日	7	¥25,400	¥16,850	20	12	5
<b>合計</b>							<b>635</b>	<b>357</b>	<b>307</b>

喜界町役場資料より作成

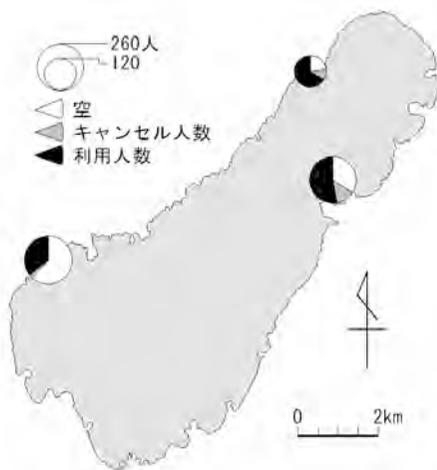


図7 各テントサイトの稼働状況

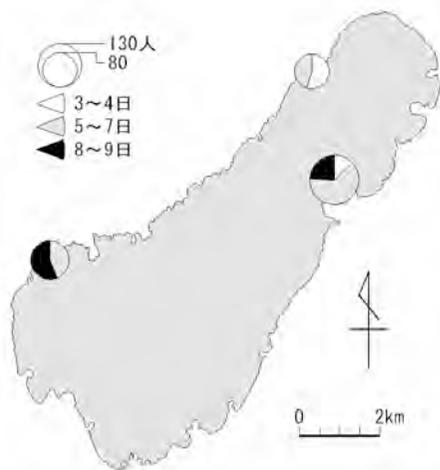


図8 各利用者の滞在日数

喜界町役場資料より作成

る。結局の所、635人の受け入れ上限に対し、172件・357人の利用申し込みがあり、その後のキャンセルなどにより、153件・307人の利用者に留まることになった。テントサイト別に見た場合、塩道長浜公園TSが64件・132人の受け入れを行い最もにぎわうテントサイトとなったものの、受け入れ定員に対する充足率で見た場合(図7)、小野津グラウンドTSが120人の受け入れ定員に対し、92人を実際に受け入れ、66.7%の充足率で最も混み合うテントサイトとなった。

各テントサイトごとに大きく充足率に差が出たのは、日食特有の現象に起因すると想定される。各テントサイトは、その所在地から皆既状態の持続時間が異なり、緯度の高い小野津グラウンドTSでは3分08秒、以下、塩道長浜公園TSで2分54秒、空港臨海公園TSで2分26秒が予測されていた。すなわち、最も皆既状態を長く観測できる小野津グラウンドTSへの人気が集中した。図8は、喜界島での滞在日数別に各テントサイトへの参加者を示したものである。全体の平均滞在日数は6.42日であったが、表1にあるように、小野津グラウンドTSは、他のテントサイトに比べ、相対的に滞在日数が短く、旅程を確保しやすかったことも、充足率が高かった理由のひとつたりえる。彼らの離島日を見ると、7月23日(金)・7月24日(土)の両日でほぼ50%の日食観測者が離島し、翌週からの日常生活へと戻っていった(図9)。

当初の利用申込者のうち、来島せずにキャンセルをしたものが50人いた。その分布を見ると、小野津グラウンドTSでもっとも割合・人数ともに多く、一方、滞在日数が6～10日と、相対的に長い空港臨海公園TSでは、ほとんどいなかった。滞在日数は喜界町内での滞在日数であり、実際にはテントサイトの利用者はフェリーに乗船するため、鹿児島港を前日の17時30分に出発し、出島時には21時10分ないし23時50分に出発し、翌日に鹿児島港に到着する。このため、実質的に+2日の休暇を確保しないと利用ができないことになる。従って、1週間以上の長期休暇の確保が可能な者のみが空港臨海公園TSを利用可能であり、そのような長期休暇が取得可能なものは、申し込み後に都合が悪くなることは少ないであろうということが伺える。一方、相対的に滞在期間の短い、塩道長浜公園TS・小野津グラウンドTSでは、申し込みをしたものの、何らかの事情で都合が悪くなり、来島できない層が一定の割合で出現した。

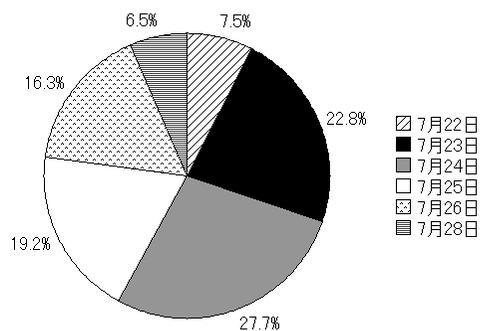


図9 テントサイト利用者の離島日  
喜界町役場資料から作成

図10は、各テントサイトの利用者を年代別に分類したものである。これを見ると、各テントサイトごとの利用者の平均年齢は小野津グランドTSの30.1歳から塩道長浜公園TSの32.3歳まで、大きな差異は出ていないものの、階級分布には大きな差異が存在している。空港臨海公園TSでは、10代以下の構成比が極端に小さく、20代・30代で、全体の8割強を占めている。これに対し、塩道長浜公園TS・小野津グランドTSではそれぞれ、10代以下が1割以上を占めるとともに、20代・30代の占有率が相対的に小さくなってきている。10代以下の参加者中、空港臨海公園TSの19歳・1人を除けば、全て15歳以下であり、保護者に帯同しての来島と判断できるため、滞在日数の短い、小野津グランドTS、および塩道長浜公園TSでは、比較的長期の休暇を取得しにくく<sup>10)</sup>、家族を帯同しての参加者が多く見られた。逆に空港臨海公園TSでは、長期滞在を可能とするだけの余暇確保が容易な就業形態に就くものや学生などが集まったものと想定され、この自由度が、キャンセル率の低さにつながったものと考えられる<sup>11)</sup>。

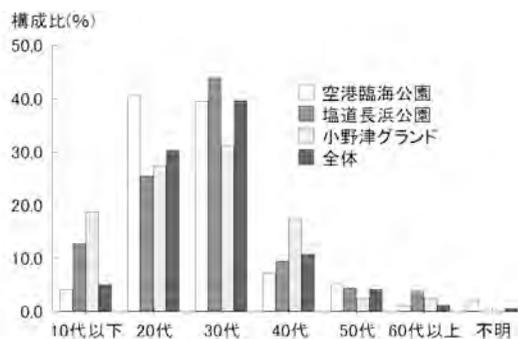


図10 テントサイト別世代構成  
 喜界町役場資料より作成



図11 テントサイト利用者の居住分布  
 喜界町役場資料より作成

図11は、各テントサイト利用者の出発地を示したものである<sup>12)</sup>。市町村別で見た場合、福岡県福岡市が33人で最も多く、ついで神奈川県横浜市・東京都世田谷区・東京都八王子市の16人がこれに続く。地域別に見ると、東京都からの113人を含む関

東圏から188人、九州圏188人、近畿圏33人と、必ずしも距離的に近い九州圏からの来訪者が多いわけではないことが確認された。これは、テントサイト利用についての告知や募集が、皆既日食実行委員会の開設したHPを通じて行われたことにより、距離の制約が生じにくかったことに加え、いずれの居住地からでも鹿児島港～喜界島間はフェリーにより約11時間30分間の航海による以外になく、鹿児島までのアクセシビリティさえ条件が整っていれば、全体的な旅程は大差が生じなかったことに起因するものと思われる。

### 3.2. 宿泊施設における受け入れ

前節では、喜界島で日食観測者を受け入れるために、一時的に開設されたテントサイトにおける受け入れ状況を概観した。本節では恒久施設である、ホテル・旅館などの宿泊施設における受け入れ状況を概観する。

喜界町内には、ホテル・旅館・民宿のほかに、ウィークリーマンション・レンタルルームなどの宿泊施設が計18ヶ所存在し<sup>13)</sup>、その多くは、前述のように、島内外へのゲートポートである湾港・喜界空港周辺に存在している(図6)。これらの宿泊施設は、喜界町役場のHP上で紹介され、自前で来島手段を確保可能な観測者の場合は、宿泊施設への宿泊も選択肢となり得た。

表2は、HP上に掲出されていた各宿泊施設の宿泊定員である。実際には休業中の施設や、常連客の受け入れのみを行った宿泊施設もあり、対応の足並みがそろっていたわけではない。9時35分前後から始まる日食を観測するためには、7月21日の晩に宿泊し備える必要がある。各宿泊施設における7月21日～23日までの稼働率を把握すると(表2)、いくつかの施設で21日の晩に80%を越えているものの、22日～23日にかけて潮が引くように日食観測者が帰って行ったことがわかる。全体で見ても、7月21日が232人で、収容定員の79.7%を占めていたものが、22日に204人・70.1%、7月23日には119人・40.9%と半減し、宿泊施設を利用した日食観測者は、ごく短期滞在であったことがわかる。

図12は、日食前夜の7月21日に、喜界町内の宿泊施設に宿泊した232名の施設ごとの分布を示したものである。テントサイトの場合、皆既状態のより長く続く島北部のテントサイトが賑わっていたことと対照的に、ほぼゲートポート周辺にのみ宿泊客が集中していることが明らかである。西岸部に位置する旅館は、常連客のみを受け入れたため、結局は、宿泊施設の集中するエリア以外の選択肢はありようがなかった。

表2 宿泊施設の概要と受入実績

名称	客室数 (室)	宿泊定員(人)		稼働率(%)			備考
		一般	団体	7月21日	7月22日	7月23日	
喜界第一ホテル	27	66	66	97.0	72.7	47.0	
ビジネスホテル林	20	20	26	90.0	50.0	30.0	
ビジネスホテル喜界	18	20	23	120.0	110.0	80.0	
旅館ぎなま荘	23	27	46	37.0	37.0	22.2	
民宿ぎなま荘	10	17	28	82.4	82.4	58.8	
碓山旅館	17	20	40	75.0	75.0	0.0	
みなとや旅館	5	15	15				休業中
旅館博多	7	19	25				休業中
民宿野間荘	14	28	50	35.7	35.7	35.7	
旅館早町荘	8	25	30	56.0	56.0	56.0	常連客のみ
民宿しらはま	5	15	15	46.7	46.7	46.7	常連客のみ
田中荘	8	20	35				休業中
ペンション南風	5	10	17	180.0	160.0	0.0	
レンタルルームタマキ	5	10	10	20.0	20.0	20.0	
ウィークリーハウスベラウン	3	6	6	366.7	366.7	116.7	
ウィークリールームますだ	2	10	10	0.0	70.0	60.0	
ウィークリー宿家里	3	9	9	88.9	22.2	33.3	
ウィークリールームゆたか	3	8	8	75.0	62.5	12.5	
合計	163	291	384	79.7	70.1	40.9	

※合計値は休業中のものを除く。稼働率は一般利用定員で算出した。

喜界町HP・観光協会資料および聞き取りにより作成

### 3.3. 喜界空港・湾港を通じた受け入れ

3.1. および3.2. から、日食前日の7月21日段階で、テントサイトを利用者が307人、宿泊施設利用者が232人の計539人が来島し、日食終了後、ほぼ1～2日で半減したことが判明した。より詳細に彼らの喜界島への入島・離島の状況を把握するために、湾港におけるフェリーへの乗・下船者数および、喜界空港における搭乗・降機者数を便ごとに把握し、皆既日食当日を挟む7月16日～7月28日の13日間について<sup>14)</sup>、日にち別にまとめたものが図13である。



図12 日食前日(7月21日)における各宿泊施設の宿泊者数  
 観光協会資料により作成

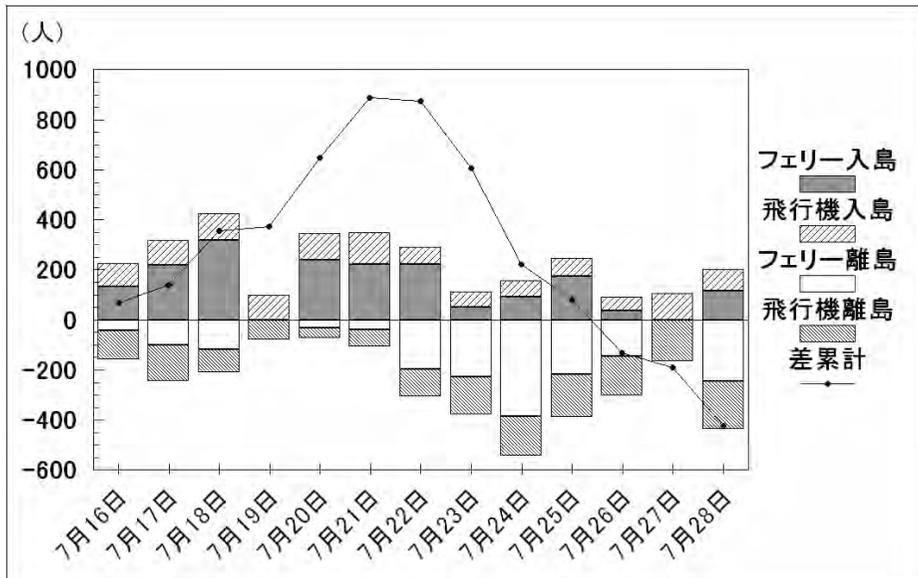


図13 喜界島の入島・離島者数の推移

喜禎運輸店・喜界空港事務所資料により作成

結果として、7月22日の食状態が始まる9時35分前後に、フェリー・飛行機を利用した入・離島者数の累計は1,089人であった。この数字は、テントサイト・宿泊施設を利用した日食観測者の合計539人よりも550人多く、彼らの投宿先については、テントサイト・宿泊施設ではないことは明らかである。アンケート結果には、若干ながら「野宿」との回答や、役場HPで紹介されていない宿泊施設名が挙げられているケースも散見されるが、550人全員を収容しきれはるはずはなく、その多くが、一時帰郷者や親類・知人宅への投宿者（以後、一括して帰郷者と称す）と想定される。より詳細に図13を分析すると、皆既日食後の離島者数を合計すると2,511人となり、日食時点までの入島者数の合計1,970人より541人多い。彼らは、7月15日以前に喜界島へ入島した帰郷者と想定される。彼らは、7月22日に離島したとしても8日間は滞在する長期滞在者でもあった。アンケート調査によると、「知人宅」・「実家」への投宿をした帰郷者の滞在日数は最長7月13日～26日までの14日間滞在するケースもあった。

以上、本章1節～3節の分析により、皆既日食当日、喜界町には帰郷者を含め、1,630人の日食観測者が滞在していたと推定された。次章では、日食観測者を対象に行ったアンケート調査の結果から、彼らが滞在中にとった観光行動について分析を行う。

表3 滞在場所別アンケート回収率

滞在場所	回収数 (通)	観測者 (人)	回収率 (%)
テントサイト	51.5	307	16.8
宿泊施設	24.5	232	10.6
帰郷者・その他	65	1,031	6.0
合計	141	1,630	8.7

複数地点に滞在する観測者は按分した



写真2 日食記念グッズの販売風景

(2009年7月19日・論者撮影)

#### 4. 日食観測者の観光行動

アンケート調査は2.2. に述べたように、141通の回収を得た。前章で明らかになったように、日食観測者の総数を1,630人と推計すると、おおよそ8.7%の回収率となる。アンケート票の配布は、主に各テントサイトおよび宿泊施設で実施したため、滞在場所別の回収率は表3の通りである。直接アンケート票を手渡す術のなかった、帰郷者からの回収率が低く、分析が十分に行い得ない点は、調査手法上の限界である。

喜界町の各地では、日食観測者の来島に併せ、彼らをもてなすために、さまざまな企画を立案していた。表4は、これらの歓迎イベントの概要を示したものである。各種民謡・島唄のコンサートや、各集落での追い込み漁の実演、染色染め教室やキビジュース作りなどの伝統技術・在来産業の紹介、島内5コースの「まち歩きガイドツアー」を実施するなど、喜界島の歴史性・文化性を日食観測者に伝える工夫が

表4 歓迎イベントプログラムの概要

実施日	開催場所	イベント名	概要
7月18日 ～24日	島内5ヶ所	まち歩きガイド	島内の各集落に伝わる歴史や文化などの「まち歩きガイド」
7月19日	空港臨海公園	ゆうーうもえーたそう喜界島かち	島唄・太鼓などステージイベントほか
7月20日	塩道長浜公園	早町地区皆既日食記念イベント	フットサル・八月踊りほか
7月20日	荒木集落	喜びの島で大いに歌おう大会	カラオケ大会・ステージイベントほか
7月21日	荒木集落	皆既日食前夜祭	染色染め教室・キビジュース作り・ステージイベントほか
7月22日 ・23日	小野津集落	2009皆既日食祭IN小野津	フニカー（船こぎ）競漕・追いこみ漁・史跡巡り・盆踊り
7月25日	湾集落商店街	商工会皆既日食記念喜界町夏まつり歩行者天国	三輪車レース・屋台・ステージイベントほか

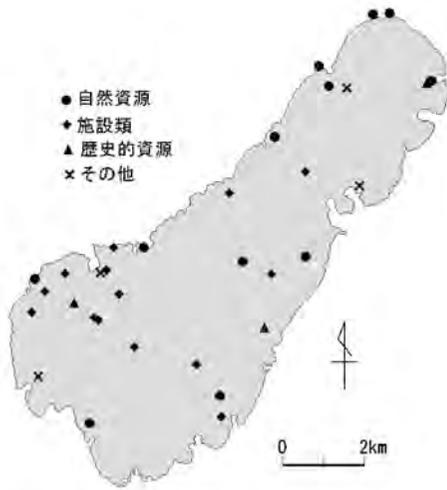


図14 喜界島における観光資源分布

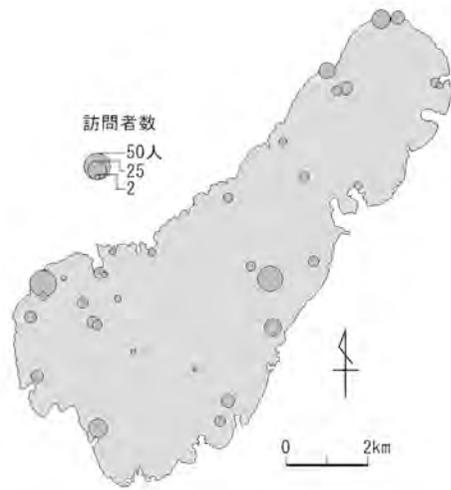


図15 日食観測者の観光資源探訪

なされていた。さらに、写真2にみられるように、皆既日食を記念したオリジナルグッズの製造・販売も各商店で見られたほか、通常であれば8月に開催される「喜界町夏まつり」が皆既日食に合わせて7月25日に前倒して実施されるなど、全島挙げて皆既日食という、「究極の一発芸」にすぎない観光資源を主目的として来島した日食観測者達に、日食以外の恒常的に存在する観光資源を提供し、再訪してもらうための土壌の提供に腐心していた。

図14は、喜界島内に分布する主要な観光資源を示したものである。凡例に示す「自然資源」には、ビーチ・海水浴場のほか、巨樹、岬などが含まれる。「施設類」は、空港や公園、お土産センター、酒造工場などが相当する。「歴史的資源」は、僧・俊寛の墓や、第二次世界大戦当時の戦争遺跡などが挙げられる。

アンケート調査の結果、観光資源への探訪先として具体的な名称が挙げられたものを総計すると、のべ408ヶ所となった。この数字を、回答者141人中、立ち寄り先を無回答な者32人をのぞいた109人で除すと1人あたり3.7ヶ所に立ち寄っている計

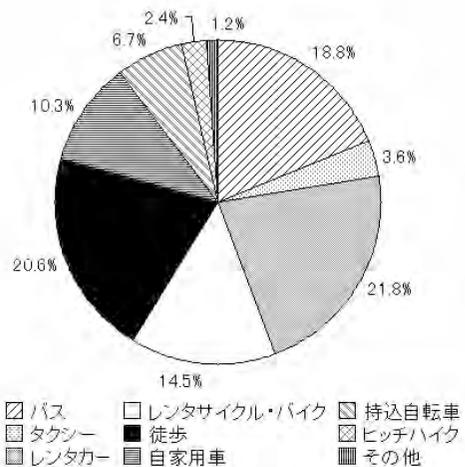


図16 日食観測者の島内移動手段

算となる。図15は、観光資源別の探訪数の分布を示したものである。アンケート調査が表3に示す通り、テントサイトと宿泊施設に滞在する日食観測者に大きく偏りを見せていたことに比べると、探訪先は全島に分散していることが明らかになった。おそらく、主たる来島目的である日食観測自体は、7月22日のごく限られた瞬間のみであり、残余の圧倒的な長期滞在期間を浪費しないためには、いずれかの観光資源へのアクセスが不可欠であったものと思われる。

彼ら外部からの日食観測者が、どのような移動手段を島内で確保していたのかを示したものが図16である。喜界島は、隔絶性の高い離島であり、フェリーで自家用車を航送しない限り、「自家用車」との回答は成立しない。であるにもかかわらず約10%が自家用車による島内移動を行っていた点は興味深い。彼らの出発地は鹿児島県内・九州域内に留まらず、東京都、大阪府など相当の遠隔地にもおよび、図11で示したように距離の制約があまり発生していない。これは、2009年3月28日から実施された「高速道路料金1,000円」への割引制度の影響が想定されるものの、この点については推測の域を出ない。

島内における唯一の公共交通機関としては、バスが3路線存在するものの、運転本数は3路線で計20便のみと、利便性は低く、18.8%のみの利用に留まっていた。結局の所、島内でレンタカーやバイク、レンタサイクルを利用した日食観測者が36.3%と最も多く、自家用車や自転車などを島外から持ち込んだ者が17.0%存在した。これに対し、いずれにも頼らず徒歩による移動(20.6%)や、ヒッチハイクなど島民の好意によるもの(2.4%)が確認された。

論者自身の日食観測者に対する聞き取りや、喜界町広報誌によるインタビュー記事により、捕捉可能な、島内における観光行動の軌跡を抽出した結果が図17-a~fである。点在する観光資源へのアクセスを当所から諦め、ホテルとビーチの短距離間を徒歩で移動するケース(図17-a)がある一方で、特殊なケースながら、徒歩で島内一周を試みる事例(図17-b)も確認された。徒歩・短距離型の派生型として、通りがかった車に便乗させてもらい、長距離移動を行う者(図17-c)、初日に持ち込んだ自転車で島内一周するものの疲労により以後、レンタバイクの使用へと現実的な転換をしたケース(図17-d)、その原初型である自転車のみを移動手段とするもの(図17-e)、自家用車を航送し、長・短距離とも車で移動をおこなうケース(図17-f)など、さまざまなバリエーションが確認された。図17-aを除けば、いずれも点在する観光資源へ積極的にアクセスすべく、さまざまな工夫をし、「究極の一発芸」の「おまけ」の余暇を満喫していた。



図17-a : 徒歩・短距離型

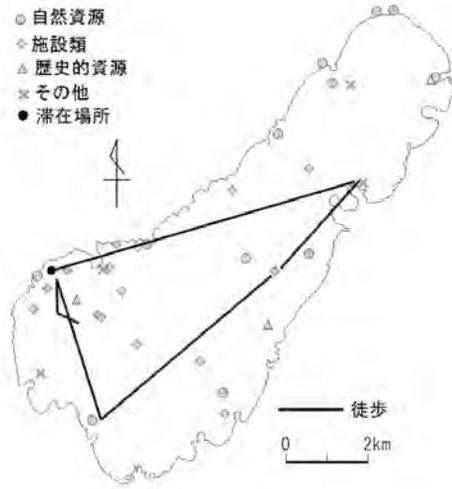


図17-b : 徒歩・長距離型

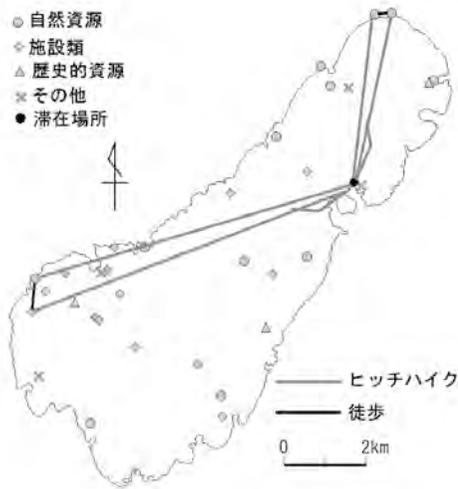


図17-c : ヒッチハイク型

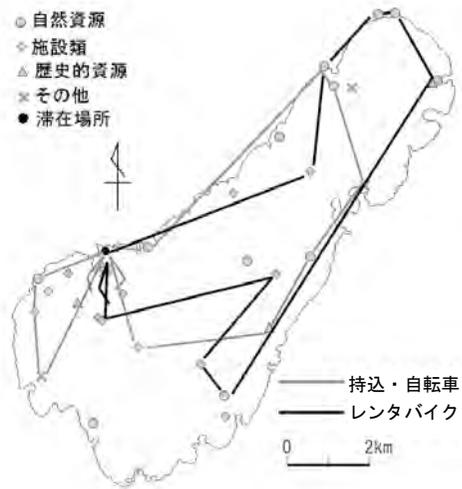


図17-f : 併用型

皆既日食観測者の受入と観光行動  
—鹿児島県大島郡喜界町を事例として—

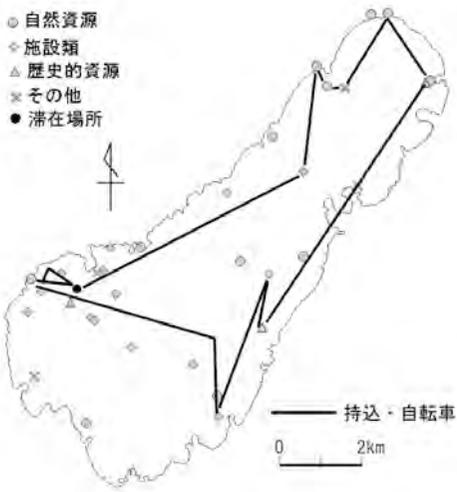


図17-e：自転車型



図17-f：自家用車

## 5. おわりに

以上、2009年7月22日に日本の陸上部における皆既日食観測としては、46年ぶりの現象を観測すべく喜界島に集まった日食観測者たちの受け入れ体制の準備と、彼らの観光行動を記録・分析した結果、次のことが明らかになった。

- 1) テントサイトには307人の日食観測者が関東・近畿圏を含む遠隔地から集まり滞在していた。当初予定していた人数を満たすことは出来ず、最大の障害は、長期間にわたる滞在日数であり、欧米諸国のようなバカンスの習慣が未成熟なわが国において、「数十年に一度」のイベントですら、体験が困難であった。
- 2) 宿泊施設利用者は、232人であり、日食終了後2日間で離島し、半減した。
- 3) 飛行機・フェリーによる入・離島者数から推計すると、1,031人の帰郷者が想定され、7月22日の日食時には1,630人の日食観測者が喜界島内に滞在していた。
- 4) 約3時間で終了する皆既日食の観察という主目的以外の時間は、長大な余暇であり、日食観測者の多くは島内に点在する観光資源へ積極的にアクセスし、またホスト側である喜界町でも各地でさまざまな歓迎イベントを開催し、島の歴史性・文化性を伝えるべく努力が行われていた。

喜界町の場合、日食観測者の受け入れを外注せずに、自前で行い、手作りのもてなしを演出していた。アンケート調査に寄せられた自由記述には、「素朴な・観光地

化していない喜界島」への驚きとともに、地元の人々のホスピタリティの高さへの賛辞が多数寄せられていた。日食後の報道などで、「陸上からの観測でダイヤモンドリング<sup>15)</sup>が観測できたのは喜界島のみであった」との情報が周知されていたこともあり、主目的に対する達成感も手伝って高い満足度を与えていた様子がうかがえる。これらの意見、コメントは、比較すべき他の類例を欠くため、ここで紹介するのみに留める。本稿自体が記録的要素が強く、十分な考察に至っていないとの指摘はもつともながら、全世界的に視野を広げれば、毎年のように皆既日食の観測は可能であり、実際に日食ハンターと呼ばれる天文ファンも実在する。今後、他の皆既日食観測点で同様の調査を実施する機会が得られんことを期待しつつ、さらなる事例の蓄積により、比較研究が必要である点を備忘に書きとどめ、本稿を結ぶ。

## 謝辞

本報告にあたり、喜界町役場 企画課、喜界空港事務所、喜界町観光協会、(株)喜禎運送店の各位には情報提供などにおいて便宜を図って頂いた。とりわけ観光協会吉山智子様には、宿泊施設のご提供のほか、ご自宅での歓待、島内観光資源の案内など物心両面でのサポートをいただいたことを付記し謝意を表します。

## 注

- 1) たとえば、山村順次(1978):草津温泉集落の再編過程—特に高原都市開発に関連して、千葉大学教育学部研究紀要27(第1部), pp. 191-215. など。多くの事例は山村順次(1995):『新観光地理学』大明堂, 270p.にまとめられている。
- 2) たとえば、白坂蕃(1986):『スキーと山地集落』明玄書房, 159p.や呉羽正昭:(2009):日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性, 地理科学 64(3), pp. 168-177.など。
- 3) たとえば、池俊介・有賀 さつき(1999):伊豆半島大瀬崎におけるダイビング観光地の発展, 新地理47(2), pp. 1-22. や、池 俊介(2001):伊東市富戸におけるスキューバダイビング導入に伴う地域社会の変容, 新地理48(4), pp. 18-37. など。
- 4) たとえば、小口千明(1985):日本における海水浴の受容と明治期の海水浴, 人文地理37(3), pp. 215-229. や小口千明(1998):療養から行楽型海水浴への変容と各地の海水浴場, 地方史研究48(5), pp. 9-14. など。
- 5) たとえば、関戸明子(2005):メディア・イベントと温泉—「国民新聞」主催「全国温泉十六佳選」をめぐる、群馬大学教育学部紀要. 人文・社会科学編54, pp. 67-83. や、関戸明子(2008):熱海温泉の鳥瞰図の特色と表現内容, 『近代日本の視覚的経験:

絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版，所収，関戸明子（2007）：『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版，206p.など。

- 6) そういう意味では，オリンピックや万博などの大規模な国際イベントも，地域単位で見た場合は再現性は低く，同列の事象といえるのかもしれない。しかしながら，大規模国際イベントの場合，投下される資本規模もさることながら，建設された関連施設群の事後利用を伴い，皆既日食観測のように事後の跡地利用などを考慮しなくて済むイベントとは峻別の必要があろう。
- 7) 国内で陸上からの観測で最長となる地点は，鹿児島県鹿児島郡十島村に属する悪石島（トカラ列島）とされ，6分25秒の皆既状態が予想された。
- 8) 2005（平成17）年国勢調査による。
- 9) 厳密に言えば，船を利用して早朝来島し，観測後その日の夜中に離島することも可能であるが，鹿児島～喜界島間の移動に11時間30分の航海を要することを考えると現実的ではない。
- 10) すなわち，会社勤めなどの，一般的な雇用形態にあることが想起される。
- 11) と，同時に長期滞在の条件を整えられる層は少なく，空港臨海公園TSで，充足率が35.8%と最も低かった理由もここにある。
- 12) 出発地は，参加申し込みを行った人物の住所に依拠しているため，非同居関係にある集団の場合，精度が保証されない。資料上の制約から代表者の住所に依拠する。
- 13) 2009年7月現在。この施設数は，観光協会に加盟している宿泊施設数であると考えられ，日食観測者を対象としたアンケート調査では，これらの施設以外の宿泊施設も具体的な名称を挙げて回答するものがあつたが，実態の把握が困難であることから捨象した。
- 14) なおこの13日間は，テントサイトが開設されていた期間と同一である。この期間中，7月19日・7月27日の両日はフェリーの寄港が無い。
- 15) 皆既日食状態から部分食への移行の瞬間に太陽の光が1ヶ所から漏れ，光る瞬間に発生する現象を指す。